

# 選 択 の 論 理

## — 犯罪・非行防止の一視点 —

臨床心理学科教授 奥 野 哲 也

### 1. 犯罪・非行と親子関係

非行や犯罪の事例を考えると、親子の関係がうまく行かなかったことから発生する種々の葛藤にその根源を持っていると考えられることがある。親子間での葛藤が、直接的な行動となって表出して、法的逸脱行動を形成する場合もあるし、直接には関係のない状況に親子の葛藤が投影されて、非行や犯罪行動を生じている場合もある。特に親子関係は、他の人間関係と異なり、葛藤が生じたからといって、簡単にその関係を解消したり、大幅に変化させるといったことができないことが、一層葛藤を深めることになっている。

例えば最近の例では、池田小学校事件がある。加害者と親との関係は報道された内容から推察すれば、お互い憎しみあった状況があったようである。親子間の心的葛藤が加害者の人格形成において、良好な心的要素を多く築くことが出来ず、むしろ不満や怒りや敵意といった好ましくない心的要素が表立ってしまうような社会性の乏しい心理機制が形成されるようになり、その結果、他人との人間関係がうまく行かず社会生活が破綻して、親子間の恨みや憎しみを他人に投影した、その挙句の事件といえることができる。

また奈良幼児誘拐殺人事件の加害者の親子関係も、先に挙げた池田小学校事件の加害者の親子関係と同様に温かいものではなく、お互いが恨みを持っているような関係であったと報じられている。その結果、加害者は刹那的な感情や

生活態度が形成されるようになり、家庭からは完全に離反した生活を送るようになっている。報道によれば、家族に受け入れてもらえないことによる情愛面での欲求不満のために心情の安定が得られにくく、社会性が育ちにくい状況があった。したがって実際の生活も低迷しやすく、向上心や意欲や根気といった、成人した個人として生活するための基本的な社会性が未熟な状況にあったと考えられる。その結果として自己への自信や満足感を含む自己充足感、自己肯定が乏しく、常に自己の暗い面にとらわれる状況にあった。性的衝動の統制も未熟で、当然ながら成熟した社会性を保てず、また成熟した対象に向かうような自信も欠如していることから最も弱い幼児に投影して統制のない性的欲望を向けるということになってしまったと考えられる。望ましい性衝動の充足には、成熟した社会性が必要なのである。

つまり非行事例の多くが、幼児期に親子の情愛の断絶を基盤に持ち、思春期になって潜んでいた親子の葛藤が表面化して活発化し、子どもの逸脱行動を容易にさせ、非行に発展していったと考えられる。すなわち、そこには単に「親子の断絶」や「親子の葛藤」といった状態を越えた、親の子どもに対する暴力が出現し、子どもがそれに応じる形で攻撃性を芽生えさせている。不快な刺激を基に、温かい情愛反応を育むことは、相当成熟した人間であっても難しいことである。

## 2. 凶悪事犯の背景状況

攻撃性という点から犯罪・非行を考えると、最近の事例では、「酒鬼薔薇聖斗と名乗る少年（当時14歳）が小学生をハンマーで殴ったり、遺体を傷つけて放置したりした神戸児童連続殺傷事件（1997）が挙げられる。この事件について神戸家裁の調査は、少年が母親の厳しいしつけで内向的になり、カエルや猫を解剖しているうちに人を攻撃するようになったと指摘した」（読賣新聞2003.7.18朝刊）とあり、神戸児童連続殺傷事件と同様に、長崎の幼児を駐車場から突き落とした事件の加害少年の家庭での母親のしつけは厳しかったと記述している。

このような親からの威圧的な教育を心的暴力、すなわち虐待とすれば、多くの非行少年が当てはまることになる。法務総合研究所の調査（2001）では、少年院在院中の2,354人の96%の者が、家族やそれ以外も含め何らかの虐待を受けていたことが明らかになっている。

このように考えると、先に取り上げた奈良幼児誘拐事件と池田小学校事件のふたつの事件のみならず、神戸児童連続殺傷事件や長崎事件なども含め、多くの事犯では、実は加害少年も、一方で親からの威圧的な教育を受ける、いわば被害者でもあるといえる。また上記で取り上げた事犯に共通するのは、事件の被害者がいずれも加害者より年下の者、つまり子どもであるということだ。自分勝手な意思を強引に押し通すには、抵抗力の乏しい、自分より弱い相手であることが求められる。親からの心理的拒否や心的暴力、或いは直接的な暴力受けた者は、自分を肯定的にみることが出来ずに成育し、自分を良くない存在と認知してしまう。そして周囲から受け入れられる機会があっても、それをそのままに受け取ることが出来ずに否定的に受け取ったりしてしまう。また不平や不満が募るとその原因を周囲に投射して、強い攻撃性を向けることになる。特に自分より弱いものに向ける

方が容易であることが作用し、幼児がその被害対象になってしまう。したがって結果的に子どもにも加害者の矛先が向かうことになる。

しかしながら、その本当の隠された敵意の対象は、実は自分の親なのである。神戸児童連続殺傷事件の加害者も親に激しい敵意を抱いていたと伝えられる。親は自分より強いし、成長した今では腕力も負けないが、親は自分より力の面では勝っていた記憶は、常に新鮮なのである。したがって反逆の矛先は、手近にいる、より弱い対象である子どもに向かうことになる。

## 3. 子どもは親を選択できない

ただ子ども側から言えば、こんな親は嫌いだと思っても、親子関係を取り消すことはできない。このことが様々な不幸を呼ぶことになる。また虐待のほとんどは、いわばこうした親子関係を一旦解消して、お互いが望む相手や状況で親子関係を結ぶといったことが可能であれば、不幸な虐待事件は起こらないはずである。しかし親子関係を一旦解消するということなどは、現実にはできない。子どもの立場から言えば、〈子どもの側から親を選択することができない〉ことから不幸が生じているように考えられる。

芥川龍之介の「河童」という小説では、子どもが生まれる前の河童の胎児のときに、生まれるのかどうかを確認する場面が描かれている。いわば子どもの意思による選択をさせるわけである。

「子どもが親を選ぶ」というのは非現実的な寓話であるが、それはさておき、単に親の在り方のみが原因で、一方的に子どもの非行が発生するというような単純な図式で、犯罪・非行が説明できるわけではない。もっとも継続的な虐待行為によって親への信頼感が喪失した結果、社会や親への反逆、反発という形で非行に走る

事例は多くある。が、親も社会の成員として存在している状況にあり、いわば非行問題といった一般的な広い立場から非行防止を考える場合は、単純に親の責任だけを論じていても決着が着くというわけではない。たとえ深刻な虐待事例でも、その背後の社会的状況を考えないと、問題解決の道を探ることはできない。

過去から現在まで様々な犯罪理論が論じられている。しかし、犯罪原因や犯罪防止についての根本的な結論が未だ得られていないように思われるのは、深刻な社会問題としての視点とその視点に立脚した具体的かつ国策として緻密な施策が不足しているからではないかと考えられる。したがって、これはなにも虐待や非行だけでなく、現代の社会病理としての不登校も同じ脈絡にあるといえる。そのためミクロ的に養育の問題やしつけや教育の視点から思春期の問題のみを考えてみても、問題の基本的な解決策には至らない。

つまり非行が多発する思春期に、何か特有の問題があるのではないかと考えられる。

4. 進化の過程からの思春期

非行好発期である思春期には、それなりに特有の問題があることは周知のことである。

思春期（青年期も含む）はErikson, E. H.に従えば、同一性の獲得が課題となる。この同一性を獲得するためには、自己が他と同じでない、自己が唯一な存在であることの強い感覚が根底に湧出している。「自分が自分である」ということが最重要課題であり、その感覚を自分に得ることができないと「同一性拡散」をして、自分自身が保てなくなる（図1）。したがって思春期の自己は、他との違いを明確にする必要性に、内から迫られていて、そのためには激しく他と争うこともある。特に身近にあって、自分と分かちがたいほどに強く結ばれていた、自己のモデルであった親であっても敵となることもある。その結果、前段階の発達期の自己モデル（親）が自分の最大の敵となるのである。そのために親を嫌い、遠ざけることになる。

一般的に言って、思春期の子どもは親を嫌っている。あからさまに嫌わないでも、反発や批判心は強い。思春期とはそういう時期である。

フロイト (心理－性的)	エリクソン (心理－社会的)	心理－社会的課題	心理－社会的様式
口 唇 期	乳 児 期	信 頼 vs 不 信	得る・返す
肛 門 期	前 児 童 期	自律性 vs 恥・疑惑	保つ・手放す
男 根 期 (エディプス期)	遊 戯 期	自発性 vs 罪悪感	探求・模倣・遊び
潜 伏 期	学 童 期	勤 勉 vs 劣等感	集める・完成する・作る
性 器 期	青 年 期	同一性 vs 拡 散	自分である・ない
	前 成 人 期	親 密 vs 連 帯	〈仲間の中に自分を失い・見出す〉
	成 人 期	生産性 vs 吸 収	生み出す・世話する
	成 熟 期	安全性 vs 絶 望	過去に生きる・死に直面

図1 ライフサイクルとその課題（フロイト／エリクソン） 福島（1982）

つまり親に反発し、嫌うという現象は思春期に特に強くて、表面化することも多い。これは思春期に生じる特徴な現象である。そのように表現してみると、親を嫌い、反発し、批判することは、思春期に起こるべき現象であり、親を批判することで、親からの支配と依存を断ち切り、親を乗り越えやすくしているとも考えられる。つまり思春期に親に反発するのは、親という「高い壁を乗り越えるために必要な助走」のようなものである。親を嫌い、遠ざけることで、親の意見や既成概念にとらわれない、親から自立した一人の人間として生きようとしていることを意味している。つまり思春期は、第二の誕生期である。そして自分の個性や自己主張、自分なりの考えを大切しようとしている。自分なりの価値観で生きることを目指し、親とは別の人格を持った存在として生きようとしている。

親を乗り越えて自分の生き方を確立することができないことには、うまく大人になることができない。親とべたべたした依存関係を続けることは、もうできないのである。特に男子は、親や自分を取り巻く周囲の者と競ったり、争ったりして自分の世界を築いてゆくように、いわば進化の過程で運命づけられているともいえる。男子は、親との対立傾向が女子の場合に比較すると、より鮮明な形で出現する。最近の進化心理学の観点からいえば、男子は女子に比較して、哺乳動物としての進化の過程で、周囲との「競争心・闘争心」が強く表出するように生理学的にも生まれついており、こうした背景を持って成長した男子は、これまでの庇護者のもとでの安楽な生活を捨てて、自分の力で自分の生き方を始めなければならない状況に立ち至っているのが思春期である。

したがって自分の前に立ち塞がる

ように感じられる親やその代償的存在である教師、時には警察官といった権威や実力を持った存在に対して、堅い心的構えのために強い不安や脅威を感じて、極端な反発や敵対行動に走ってしまう。教師や警察官が親の代償的者と感じられるのは、物事の善悪を示したり、指導したり、しつめたりする存在であるからである。親は子どもを保護し、愛情を注いで育てるが、物事の善悪を教え続ける指導者としての機能もある。思春期の子どもにとって、こうした親の機能は自分をいつまでも子どもの状態に止めようとするものとして感じられるのである。それは言い換えれば、自分で自由奔放に物事を決定することが許されていない、自分の力で自分のすることを「選択」できない状況に立ち至っているということを、痛みを伴って感じているのである。思春期は、こうしたことを非常に強く意識して、自分がひどく傷つけられたように感じる時期のことである。

ちなみに、大学生に「中学・高校の頃を思い出して“学校で嫌いだったこと”をあげてください（複数回答可）」というアンケートをとると、「学校活動（マラソンなど）」が第1位（39%）。それについて、「先生（35%）」が第2位にあげ

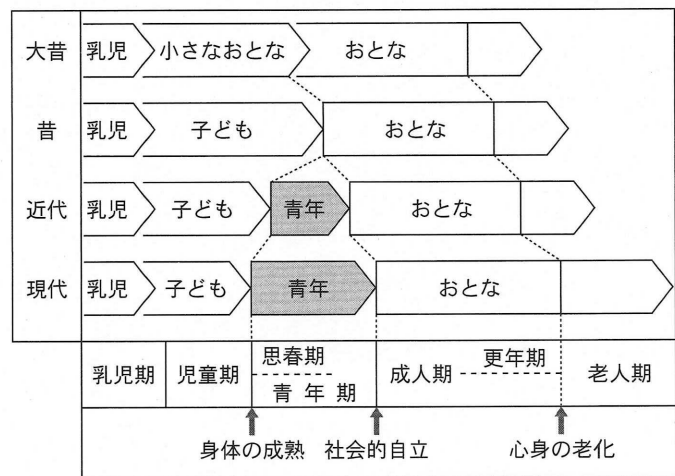


図2 青年期の誕生とその延長（福島 1992）

られる〔以下、テスト（31%）、授業（30%）などが続く〕。

時代の経過と共に、次第に思春期や青年期の時期が増加・延長の傾向を示しており（図2）、それだけ成長や発達に関する問題が複雑で困難な状況を呈することになっているのが、現代である。

## 5. 思春期の選択と抑圧

以上のようなことから考えると、思春期にとっては自己責任による「選択」が必要となる時期でもある。しかし自己責任による自由な選択ということを実現するのは、なかなか難しい。選択には常に責任と義務が伴う。つまり大人から見ると、子どもは未熟な存在であり、知識も経験も大人に較べると劣った存在であると言わざるを得ない。時に思春期の子どもは危なげで、危険に満ちているように大人には感じられる。幼児期と違って、なにより思春期は行動力も実行力も活力にも満ちている。そして何事にも全力で取り組んでしまい、足許を見失いがちになることが多い。したがって思春期の子どもの「選択」は、当然のことながら、大人にはとても危険に満ちたものとして映る。そのため、大人は子どもに、絶えず注意や指導をしてしまうことになるのである。その結果は明白なように、子どもから言えば、自分の主体的な選択の機会を大人が勝手に踏みにじってしまうことになる。

こうした考え方や立場から犯罪や非行の要因を考える理論としては「分化的抑圧理論」がある。分化的抑圧理論（Differential Oppression Theory）とは、Regoli, R.とHewitt, J.（1994）によって主張された考え方で、Lawrence, R.（1998）により紹介されている。

彼らの主張によれば、非行とは、子どもが、親や権威者との抑圧関係に反抗する中で生じる行為であるとされる。すなわち子どもと親（大

人）の抑圧関係は、親が子どもを厄介者で自分よりも劣っている、未熟な者と決めつけたことにある。そしてその結果、家庭や学校の秩序を維持する規範や価値観を一方的に押し付けることによって生じるものであるとされる。その状況下では、子どもは自分の意思や欲求を抑圧してしまうことになる。そうした抑圧関係で生育した子どもや愛情の欠如、情緒的・言動的虐待の中で育てられた子どもは、その抑圧の原因であると見なす人々や、社会制度に対して反抗することによって復讐を図ることが多いと考えられている。例えば、学校における器物損壊といった行為は、生徒が教師に腹を立てるために起っている事が多く、抑圧を強いる者（親・教師＝大人）に対して暴力という形で復讐しているのである。

またLawrence, R.は、「重大な犯罪は、拒絶・虐待・放置の対象となった少年が行うことが多い」という分化的抑圧理論に先立つMcCord, J.（1983）の説を紹介している。したがってこれらの考え方では、凶悪な犯罪・非行事犯は、抑圧的・虐待的關係の結果として生じており、犯罪・非行防止には、なよりも親が子供を尊重し、自分と対等の、価値のある人間として扱うことが必要なのである。そのためには、親（大人）は子どもに信頼を寄せ、自分の人生は自分で選択ができることを保障することが大切であるというわけである。

## 6. 選択の意義

「選択」の重要性を説いたのは、Szondi, L.（1893－1986）である。彼の思想は、「人生は選択であり、人生はその選択の結果である」ということである。人生には多くの選択の機会がある。考えてみると毎日は、朝起きてから夜寝るまで、「あれにするか、これにするか」といった選択をしないと先に進まない状況にある。人

生は選択をし続けなければならない。それこそ人が生きるということの現実的・具体的状況である、とも言える。ただ更にいえば、こうした選択に満ちた状況の中であって、真にその日地の人生に重要な意味を持っている選択の機会は限られているといえる。毎日のありとあらゆる選択すべてが人生に本質的な重要性を有しているわけではない。たいして意味のない選択も存在する。ただしそのさしたる重要性のないことも選択という状況を避けて過ごすということとはできないが……。それでは、何がより重要で、何が重要でないのか？ Szondi, L.は、人生を決づける重要な選択は、5つあると規定した。

その第1は、「友人の選択」である。周囲に多くいる人物の中で、どの人物を親友として選択するのか？ この友人の選択は、その人が秘めている「理想の具現化」と考えた。人生における重要な選択の第2は、「配偶者の選択」である。魅了する多くの異性の中で、いかなる異性を自分の結婚相手として選び、一生を共にするのか？ この配偶者の選択は、その人の内に秘めた「性的欲望の具現化」したものと考えた。重要な選択の第3は、「職業の選択」である。世の中にあまたある仕事のうち、どれを自分に相応しい天職として、職業を選択するのか？ この職業の選択は、その人が内に持っている「社会性を具現化」したものと考えられている。次に重要な選択の第4は、「疾病の選択」である。世の中に蔓延する多くの病のうち、どのような疾病に罹患するのか。感染症のこともあろうし、その他の流行病のこと、そうでない病もあろう。こうした病のうち、どのような病気に罹患するのか？ この疾病の選択は、その人が内に持っている「社会性の負の要素を具現化」したものと考えられている。最後の人生における重要な選択の第5は、「死の選択」である。この場合に死とは、自殺などの特別な場合における死の形態であるとされている。こうした死亡の形態

も、考えてみると実にさまざまなものがあると考えられるが、いざとなった場合、人はどのような形態を選択するのか？ この死の選択は、その人が内に持っている「負の社会的要素を具現化」したものと考えられている。また「職業の選択」のバリエーションとして、その人が内に秘めている「反社会性を具現化」したものとして、犯罪の選択をSzondi, L.は考えている。いろいろな事犯の罪種があるが、その人は、そのうちどのような事犯の犯罪を選択するのか？ これもひとつの重要な選択であるとしている。

以上のように、人生における重要と考えられる主要な選択においては、その人の無意識の内に、普段は深く秘められており、なかなか表面化することはない衝動Tribが、顕在化して、人にある方向付けられた選択をさせているとSzondi, L.は考え、遠大なSzondi理論が展開したのである。Szondi, L.は「選択」の重要性を認識して理論を構築したわけである。

## 7. 現代教育の困難さ

「選択」の重要性については、先に述べたとおりであるが、現代の子どもの病理には自由な選択が保障されていないことから生じている多くの現象があると考えられる。多くの病理を具現化している子どもを持つ親は、一般的に子どもに対する理解が足りないことが多い。特に凶悪な事犯に走った加害少年の場合や不登校児の親の場合にはとりわけそういった現象が目につく。

ところが一方、上記を強調すると矛盾の壁にぶつかる。つまり小・中学校の教員は大変難しい業務の従事者といえる。つまり教育の一側面として、過去に価値付けられていることを（段階的に）整理して指導・伝授するという機能があるが、既述したように親の代理者として教員は生徒からの反発や批判・反抗に晒される時期

にあったっている。そのために生徒からの反発は大きい。まして現代の風潮は個性の尊重を重視しており、そのために学校教育自体が画一的だと見なされて、困難な風潮にある。その結果、親自身が親の機能として本来持っている、子どもを教育する機能を軽視または放棄している現状を背景にした日本の現代社会における学校教育は、十分に機能しない状況に面している。その結果は、反動的作用として、先に紹介した「分化的抑圧理論」のような心理的メカニズムから、極端な親の虐待行為が生じているし、同時に極端な放任・放棄も見られる状況になる。そして親は子どもを教育する難しさから、学校に生活全般の指導を丸投げしている現状のために、一層状況が困難性を増している。

このような教育現場に対しては、生徒は敏感に反応する。つまり関心を喪失してしまった魅力のない教室には入ろうとしないのである。不登校の原因は直接的・間接的に種々あるが、不登校児の相談では、学校への関心や魅力を失ってしまった生徒に出会うことが多い。

また同一の心理規制ではないが、こうした表現で言えば非行少年では、単に学校だけではなく親や社会にも関心や魅力を失っている、と表現できるかもしれない。ただし、非行と不登校を同一線上で並べて述べるようにしたのはではなく、思春期にある者は、周囲の状況や有様に極めて否定的な心的抑制が働きやすいということを指摘したまでである。

## 8. 「選択」の現代的問題

思春期における「選択」の重要性については既に述べたが、自分の親を「選択」することはできないにしても、教育制度という側面では、もう少し選択の幅を持たせた自由度が存在すべきではないか。日本は実質的に高校全入状況にあり、本人の能力や関心の有無と無関係に高校

への進学が、親から当然視されていることが多い。不登校児童・生徒の増加と、このことは決して無関係ではない。高学歴社会は、「高学歴＝高収入＝立派な社会人」という図式を社会的に好ましいものとして価値づけてしまっている。ここには、ほとんど「選択」の余地がない。たとえあっても、あれかこれかの二者選択であり、そこにはプラスかマイナスかといった価値的概念が作用して、「勝ち・負け」といった単純で、かつ自由度の欠落した、「選択」という言葉に相応しくない状況があるだけとなっている。したがって子どもに対しては好ましくない選択をしないように、親の願いや熱意がこもることになる。少子化傾向が拍車を掛ける情勢も加わり、「選択」の場から更に一層、自由な要素が失われることになる。

教育制度については、通学できる公立学校の選択をはじめ、教科書の選択に幅ができるなど最近は何々の試みがなされるようになってきている。「選択」の自由度を高める教育制度の施策が、社会に活性力や意欲を生む要因となり、犯罪・非行の減少に繋がることになれば幸いである。

## 【引用・参考文献】

- Daly, M. & Wilson, M. (1998): Homicide. Adine de Gruyter. 長谷川真理子・長谷川寿一訳 (1999). 人が人を殺すとき. 新思索社
- Evans, D. & Zarate, O. (1999): Introducing Evolutionary Psychology. Dylan Evans. 進化心理学入門 (2003). 講談社
- 福島 章 (1982): 犯罪心理学入門. 中央公論社
- 福島 章 (1992): 青年期の心. 講談社
- 加澤正樹ほか (2001): 児童虐待に関する研究 (第1報告). 法務総合研究所研究部報告11. 法務総合研究所
- Lawrence, R. (1998): School crime and juvenile justice. Oxford University Press, Inc. 平野裕二訳 (1999). 学校犯罪と少年非行. 日本評論社
- Szondi, L. (1944): Schicksalsanalyse. Benno Schwabe, Basel

